

---

---

# 日本地球化学会ニュース

No .173

2003 .5 24

---

---

## 主な記事

### ●学会記事

- 2003年度日本地球化学会年会のお知らせ(2)
- 第13回ゴールドシュミット国際会議 (Goldschmidt 2003) 日本開催のお知らせ
- [ 選挙公示 ] 役員選挙の立候補および推薦候補者の届出について
- Geochemical Journal 特集号 ( Nozaki Memorial Issue ) への投稿のお願い
- 鳥居基金・三宅賞の募集のお知らせ
- 新名誉会員のご紹介
- 研連, 各種委員会議事録

### ●その他のシンポジウム, 人事公募等の各種情報のお知らせ

- 書評

現在, 日本地球化学会のホームページを国立情報学研究所ホームページ内の学協会情報発信サービスの中で公開しております。研究助成, シンポジウム, 人事公募等の各種情報は随時更新しておりますのでそちらをご覧ください。

URL アドレスは, <http://wwwsoc.nii.ac.jp/gsj2/index.html> です。

また, 独自ドメイン名を取得いたしましたので, 暫定的ですがこちらも公開中です。

URL アドレスは, <http://www.geochem.jp/>です。

## 2003年度日本地球化学会年会のお知らせ<sup>(2)</sup>

主催：日本地球化学会

共催：日本化学会

後援：くらしき作陽大学

倉敷市

会期：2003年9月7日(日)

会場：くらしき作陽大学（山陽本線 / 山陽新幹線新倉敷駅から徒歩12分）1号館

内容：地球化学市民講座，一般講演（ポスター），総会

地球化学市民講座：『世界の海洋に学ぶ瀬戸内海の未来』

中・高校生を含む一般市民向け公開講演会

紀本岳志『瀬戸内海をはかる 観測データが語る豊かな海の未来』

田上英一郎『海の物質循環を動かす小さな生き物たち』

2003年9月7日(日) 10時30分～12時30分

くらしき作陽大学1号館

一般講演発表分野：大気 / 降水，岩石 / 地殻，鉱床，有機物，生物，陸水，温泉 / 熱水，地球外物質，海洋，堆積物，環境

その他（Goldschmidt 会議に含まれる分野）

一般講演発表形式：ポスターセッション

午前10時開場，コアタイム13時～14時，15時取り外し，1人あたりの発表数の制限はありません。

総会：9月7日(日) 14時～15時

学会賞などの表彰は，総会の中で行いますが，受賞講演は，Goldschmidt 国際会議（講演は9月8日から12日まで）の中で行います。

懇親会：年会独自には行いません。Goldschmidt 会議の Ice Breaker Party に合流します。

9月7日(日) 午後5時～8時（流れ解散）

場所：くらしき作陽大学学生ホール（食堂）

参加登録費，懇親会参加費など

1. 参加登録費（講演要旨集1部および送料を含む）

予約申し込み（2003年8月11日(月)まで）

会員：1,000円，学生会員：500円，

会員外：3,000円，学生会員外：2,000円

Goldschmidt 会議参加者は，予約申し込みに限りに，会員で有る無しにかかわらず無料

当日受け付け

会員：2,000円，学生会員：1,000円，

会員外：3,000円，学生会員外：2,000円

2. 懇親会参加費

予約申し込み（2003年8月11日(月)まで）

一般：1,000円，学生：500円

当日：2,000円

Ice Breaker Party に合流するので，Goldschmidt 会議参加者は無料

3. 講演要旨集（当日販売）：1,000円 / 部

講演要旨集（郵送）：1,500円 / 部

4. 参加費，講演要旨集代，懇親会費の支払い方法

郵便振り替えにて送金（送金内訳を明記のこと）

（郵便振替受領証をもって領収書とする。別途領収書を必要とする場合，大会当日，受付に申し出ること）

郵便振替口座：00880 3 78731

加入者名：日本地球化学会2003年準備委員会

参加申し込みなどの日程（いずれもホームページから）

講演申し込み締切り：2003年6月10日(火) 17:00

講演要旨受け付け締切り：2003年7月15日(火)

17:00，または郵送で2003年7月11日(金) 必着

参加予約申し込み締切り：2003年8月11日(月)

17:00，参加予約および講演申し込みはホームページ上からの受付に限らせて頂きます。

学会ホームページ<<http://www.geochem.jp>>から所定のページを開いて下さい。受け付け開始は，講演申し込みが5月23日，その他は7月2日頃を予定しております。講演要旨も，出来るだけホームページ上から所定の書式（PDF形式；300KB程度まで）に従ってお送り下さい。ホームページからの要旨の送付が困難な方は，7月11日(金) 必着で郵送で受け付けます。

本号ニュース添付の『講演要旨作成上の注意』に従って作成し，下記の年会連絡先へお送り下さい。

なお，今年の講演要旨は年会後，ホームページで公開される予定です。

宿泊など：準備委員会から御世話は致しませんが

Goldschmidt 国際会議のサイト

<<http://www.ics-inc.co.jp/gold/2003/>>

に宿の紹介があります。

年会連絡先：

〒464 8602 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学環境学研究科地球環境科学(理学部)  
2003年度日本地球化学会年会準備委員会  
大会準備委員長 田中 剛  
事務局 山本鋼志  
会計 南 雅代

Tel : 052 789 2522 , Fax : 052 789 3033  
E-mail : <nenkai@gcl.eps.nagoya-u.ac.jp>

講演・参加申し込み・要旨送付に関する問い合わせ :

米田成一, 小林貴之(学会ホームページ担当)  
Tel : 03 3364 7142, Fax : 03 3364 7104  
E-mail : <nenkai2003@geochem.jp>  
学会 HP : <http://www.geochem.jp>

### ゴールドシュミット国際会議記念・倉敷市民講演会

地球化学会では、年會に先立ち、倉敷市において市民向けの公開講演会(どなたでも参加歓迎)を開催します。

主催: 日本地球化学会, ゴールドシュミット国際会議組織委員会, 倉敷市, 倉敷市教育委員会

日時: 8月24日(日) 午後1時から4時頃まで

場所: ライフパーク倉敷 大ホール

対象: 中学・高校生を中心に小学校高学年から一般市民までを含む

内容: 酒井 均「火星にも生き物は生まれたか? 温泉大好きバクテリアは語る」

野尻幸宏「地球温暖化。これってこまるの? どうしよう?」

風早康平「火山噴火: その恵みと災害」

### 第13回ゴールドシュミット国際会議 (Goldschmidt 2003) 日本開催のお知らせ

開催時期: 2003年9月7日(日)~12日(金)

開催場所: くらしき作陽大学(倉敷市)

主催: 日本地球化学会・The Geochemical Society・The European Association for Geochemistry・The Mineralogical Society of America

後援: 産産業技術総合研究所・くらしき作陽大学・倉敷市・岡山県・日本万国博覧会記念協会

セカンドサーキュラーを会議 website 上で発行し、参加登録の受付を開始しました。http://www.ics-inc.

co.jp/gold 2003/をご覧の上、奮ってお申し込みください。

参加登録の受付 日本地球化学会の会員は参加登録料の割引があり、早期登録料(2003年7月7日まで)は一般28,000円、学生13,000円です。さらに、会議で発表する場合は、別途講演要旨投稿料12,000円の払込が必要です。講演要旨は、会場で配布されるCD-ROMに加え、*Geochimica et Cosmochimica Acta* の supplemental issue として印刷発行されます。

今後の主なスケジュール

6月23日 プログラム公表(Website)

7月7日 事前登録締め切り、宿泊・エクスカーション等申し込み期限

9月7~12日 第13回 Goldschmidt Conference(倉敷)

連絡先: E-mail: gold 2003@ics-inc.co.jp

(第13回ゴールドシュミット国際会議組織委員会  
委員長 松久幸敬)

### 第13回ゴールドシュミット会議 ショートコース開催のお知らせ

本年9月に開催されるゴールドシュミット会議にあわせ、ショートコースを計画しております。第一回目のショートコース(2001年10月開催)では、Robert Clayton 教授, Keith O'Nions 教授を講師として招聘し、地球化学的応用を講義していただきました。今回のショートコースでは、より基礎的な点に焦点を絞り、ICP 質量分析計(ICP-MS)の原理と応用、さらには最近注目されている同位体効果を取りあげます。ICP-MSについては、装置の基本的な動作原理から、レーザーアブレーション法を組み合わせた最新の応用研究までをカバーしていただき、また、同位体効果については、重元素の安定同位体分別や、質量に依存しない同位体効果についてお話いただきます。世界第一線でご活躍の研究者の中で、特に若手の研究者の方々を演者としてお招きしました。アジア・パシフィック地域の研究者、特に若手の研究者の方々に楽しんでいただけるセミナーにしたいと考えております。ふるって参加下さい。

記

ゴールドシュミット会議ショートコース

日 時：9月6～7日

開催場所：岡山テルサ（岡山県都窪郡早島町，JR山陽本線中庄駅からタクシーで10分）

招聘演者：Gunther Detlef (ETH), Simon Jackson (ANU), Alex Halliday (ETH), 藤井俊之（京大原子炉）

#### 演者と講演内容

Gunther Detlef (ETH, Switzerland): Principles of ICP-Mass Spectrometry

Alex Halliday (ETH, Switzerland): Application on Isotopic Chronology

Toshiyuki Fujii (Kyoto Univ., Japan): Principles of Isotopic Effect

Simon E. Jackson (GEMOC, Australia): Laser Ablation and MC-ICP-MS Techniques

Keith O'Nions (Oxford Univ., UK): Biochemical Applications

後援：Agilent Technology, New Wave Research, セキテクノトロン, 丸文株式会社, 日本宝石協会

受付開始：2003年4月1日から（締め切り7月末日）

定員：45名

参加費：12,000～14,000円（参加費，宿泊費，懇親会費，二日目朝食代を含む）

申し込みおよび詳細な情報：

[http://www.geo.titech.ac.jp/epss/ss\\_2003/index.htm](http://www.geo.titech.ac.jp/epss/ss_2003/index.htm)

世話人：平田岳史（東京工業大学）

#### [ 選挙公示 ]

### 日本地球化学会2004・2005年度役員選挙の立候補および推薦候補者の届出について

本会会則により2004・2005年度役員選挙を以下の日程で行います。

立候補・候補者推薦締め切り：6月30日(月) 必着

選挙公報・投票用紙発送：7月上旬

投票締め切り：8月25日(月)

選挙結果公表（総会）：9月7日(日)

つきましては、下記要領で会長・副会長・監事・評議員に対して、それぞれ立候補者および推薦候補者の届け出をしていただくようお願いします。

1. 会長1名，副会長1名，監事1名，評議員20名を選出します。

2. 立候補者の届け出は，届書を立候補者自身が，(1)選挙管理委員会に持参するか，または(2)選挙管理委員会宛に送付して下さい。

3. 推薦候補者の届け出は，推薦候補者名と推薦者名を記した届書に推薦候補者の承諾書を添えて，推薦者またはその代表者が，(1)選挙管理委員会に持参するか，または(2)選挙管理委員会宛に送付して下さい。なお役員選出細則第8条により，次の方々は次期評議員に選出することができません。

石橋純一郎，植松光夫，蒲生俊敬，坂田将，佐竹洋，富樫茂子，野尻幸宏，乗木新一郎，益田晴恵，松田准一

4. 第2項，第3項に記した以外の方法で届け出が行われた場合には，届け出を受け付けることができません。郵送の場合には裏に（選挙）と記し，「書留郵便」としてください。

5. 届け出の締め切りは6月30日(月)（必着）です。

6. 選挙管理委員会の所在地は次のとおりです。

〒305 8567 つくば市東1 1 1 中央第7  
産業技術総合研究所地圏資源環境研究部門  
資源有機地化学研究グループ

坂田 将

Tel : 029 861 3898, Fax : 029 861 3666

E-mail : su-sakata@aist.go.jp

### Geochemical Journal 特集号 (Nozaki Memorial Issue : Marine Geochemistry (仮題)) への投稿のお願い

平成15年1月4日に東京大学海洋研究所海洋無機化学分野教授野崎義行氏が急逝されたことは，海洋地球化学の研究に携わる我々にとって大きな驚きであり，痛恨の極みであります。野崎氏は天然放射性核種を用いた海洋における物質循環（オーシャンフラックス）の研究，希土類元素の海洋地球化学的研究を中心として数々の研究成果を挙げ，1998年には日本海洋学会賞，2001年には日本地球化学会賞を受賞されています。著名な国際会議で数々の招待講演を行い，世界的にもその業績は高く評価されています。また，東京大学海洋研究所において白鳳丸研究航海を指揮され，日本各地の海洋地球化学研究者に海洋観測の機会を提供してきました。さらに，現在計画されている世界的プロジェクト「GEOSECS II」の中心人物でもあり，

世界に先駆け「GEOSECS II」を日本が立ち上げるという意欲を持っておられた矢先の訃報でありました。

このように日本のみならず、世界の海洋地球化学をリードしてきた野崎氏を失ったことは、世界中の研究者にとって甚大な損失であります。しかし、この悲報に接し研究が停滞することは、海洋地球化学の発展に尽くされた野崎氏の遺志に反することと信じます。そこで、生前の野崎氏を偲ぶとともに、今後の海洋地球化学発展の一助とするため、Geochemical Journal に追悼記念特集号を発刊することにしました。幸いにもGeochemical Journal 編集長松田准一氏からのご理解を得て、この企画が実現の運びとなりました。

そこで、海洋地球化学研究に携わる皆様から、Geochemical Journal 特集号への投稿をお願いいたします。今回は、Geochemical Journal の特集号ということで、レビュー論文ではなく、原著論文に限ってご投稿下さい。投稿の形式はGeochemical Journal の通常号と同じです(Geochemical Journal, Vol 37, No.1 又は website, <http://www.soc.nii.ac.jp/gsj/2/GJ.html> をご参照下さい)。原稿の締め切りは2003年8月31日とさせていただきます。海洋地球化学の幅広い分野からのご投稿をお待ちいたします。なお、投稿先は通常号と同じで、野崎記念号への投稿であることを明記して松田准一編集長宛てをお願いします。論文は通常の review process にかかけますので、御承知おき下さい。

2003年2月17日

Geochemical Journal 特集号編集委員  
(小畑, 植松, 佐野)

### 2003年度第2回鳥居基金助成の募集について

2003年度第2回鳥居基金助成の応募の締め切りは2003年7月末日となります。本学会ホームページに応募要項がありますので、ご参照の上、応募書類を提出して下さい。なお今回の助成の対象は、2003年10月から2004年9月までの1年間に実施される海外渡航及び研究集会となりますのでご注意ください。

提出先: 〒113 8622 東京都文京区本駒込5 16 9

(財)日本学会事務センター内

日本地球化学会鳥居基金委員会

なお本件に関する問い合わせは庶務幹事(下記)まで。

鍵 裕之

〒113 0033 東京都文京区本郷7 3 1

東京大学大学院理学系研究科地殻化学実験施設

Tel : 03 5841 7625, Fax : 03 5841 4119

E-mail : kagi@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp

### 2003年度地球化学研究協会学術賞 「三宅賞」および「奨励賞」候補者の募集

地球化学研究協会より、「三宅賞」および「奨励賞」候補者の推薦を依頼します。

下記の要領で応募して下さい。応募用紙などは学会事務局に送付してあります。

#### 1. 三宅賞

対象：地球化学に顕著な業績をおさめた科学者

表彰内容：賞状、副賞として賞金30万円、毎年1件  
(1名)

#### 2. 奨励賞

対象：推薦締切日に35才以下で、地球化学の進歩に優れた業績を挙げ、将来の発展が期待される研究者

助成内容：1件10万円、毎年1件(1名)

#### 3. 応募方法：所定の用紙に略歴、研究業績、推薦理由などを記入し、下記のあて先へ送付して下さい。

#### 4. 締切日：2003年8月31日

#### 5. 応募先：地球化学研究協会

〒166 0002 東京都杉並区高円寺北4 29 2 217

Tel : 03 3330 2455 (Fax 兼用)

### 新名誉会員のご紹介

#### 一國雅巳名誉会員



一國先生はこわい先生である。にこっと笑って人を切る。切られた人はあとでその事を知る。学生時代から今に至るまでご尊顔を拝するたびにこの思いは消えない。実際に先生に薫陶を受けた人はわたくしのこの気持ちを理解してくださるに違いない。殊に論文の共著者になっていただくのは至難の事である。Authorship に関して峻厳といてよい。この事を反映してか、単独名の論文が多いのは最近の大学人としては異例といてよいほどであろう。先日定年退職のための整理をしていて一國先生からの古い書簡を再読する機会があった。ある研究者の研究上の悩みを綴った記事に対する私の共感と、

自身の問題を内容とする手紙に対する返信であったらしい。先生の結論は「研究者は悩むほど成長する。したがって私は君に助言はしない」と言うものであった。当時これにたいしてどのような気持ちを抱いたかを思い出せないが、今はこれを心から味わう事ができる。何時だったか先生は実は自分は数学をやりたいのだと述懐された事を記憶している。恐らくその思いは地球化学の論文のエッセンスを数式で簡潔に表現するというスタイルに現れていると思う。したがって先生の書く論文は短くも美しい。私もそれを学びたいと試みたが、所詮器の違いは仕方の無いもので、唯長い論文を書くだけの“自称”弟子が出来上がったに過ぎなかった。大学人の中には「自分の弟子である誰それは……」という人があるが、私はこれが嫌いである。一國先生の聲咳に触れるうちにこうなったらしい。それでも、先生は認めていないが先生の弟子である、と密かに思っている人も少なからずあるに違いない。このたび先生が学会の名誉会員になられたことを心からお祝いすると同時に自称弟子のみならず、多くの隠れファンが居られるのだなと納得した次第である。

(高野穆一郎)

#### 略歴

- 1930年 11月29日生まれ
- 1953年 東京大学理学部卒業
- 1961年 東京都立大学助教授
- 1970年 東北大学教授
- 1977年 東京工業大学教授
- 1988～1989年 日本地球化学会会長
- 1991年 東京工業大学名誉教授
- 1992年 埼玉大学教授
- 1996年 埼玉大学定年退官

#### 小嶋 稔名誉会員



2002年度日本地球化学会総会において小嶋稔博士が名誉会員に推挙されました。小嶋先生はもともと岩石磁気学・古地磁気学の研究を始められました。その後、K-Ar, Ar-Ar年代測定法を用いた年代学や地球大気の脱ガス・形成史などの研究をされました。これらの研究はHe, Ne, Ar, Kr, Xeの5つの希ガスすべてを対象とした現在の希ガス同位体地球科学・惑星科学の分野の礎

となり、この分野の確立と発展に対し大きな貢献をされました。これらの一連の業績により2000年度柴田賞が授与され、Geochemical Society, ヨーロッパ地球化学連合、隕石学会ならびにAGUのフェローにもなられています。また、これらの国際的な学術活動を通じて得た交友関係を最大限に生かし、日本の地球化学分野の国際的発展のために努力をされてきました。

小嶋先生は1930年11月24日のお生まれで、1954年に東京大学理学部物理学科(地球物理課程)をご卒業後、トロント大学物理研究科地球物理コースに進学しPhD(1958年)を取得されました。その後、東京大学理学部地球物理学科助手、助教授、教授を歴任されました。東京大学退官後、大阪大学理学部宇宙地球科学科教授として赴任なされました。当時の大阪大学は宇宙地球科学科が新設されたばかりで、研究室には小嶋先生と松田准一先生(現在:大阪大学教授)のスタッフ2人、研究員1人、私を含む学部生3人の計6人で研究室を立ち上げることになり、学科の新設とともにご尽力されました。

小嶋先生は学生の指導にも熱心で、当時、研究室には実験装置も整っていなかったため、我々の卒論のために他の研究室に実験できるように頼んでおられました。また、知らないことがあっても「恥ずかしいことではない」とおっしゃって、その方面の専門家に教わりに行っておられました。こうした先生の科学に対する謙虚でかつ情熱的な姿勢は、当時学生だった私には大変印象に残っております。さらに、学生が少なかったおかげで、私などはマンツーマンで指導していただきました。その際、先生は自分の考えを文章で明解に表現することを重視しておられ、常に論理的な文章を求められました。このようなご指導を頂けたことはとても幸せなことと思っております。今後も、学会などの場で貴重な助言を頂けることを願っております。

(柴田智郎・北海道立地質研究所)

#### 酒井 均名誉会員



酒井均先生が名誉会員に推挙された理由は、研究活動、学会の運営及び国際的活動のすべてにおける日本地球化学会に対する多大な貢献であることは言うまでもありません。しかし、酒井先生のそのような貢献の中で最も大きなものは研究活動におけるものではないかと思われま

井先生は日本の地球化学を国際的なものに育てることに大きく貢献されておられますが、それも主に研究活動を通して行われています。酒井先生の研究は実に幅広く、様々な課題に関係しています。その中心は若い時から取り組んでおられる硫黄の安定同位体比に関するものですが、その他にも酸素、水素及び炭素同位体比を利用して、私が岡山大学温泉研究所（現固体地球研究センター）で酒井先生の研究室で過ごさせていただいた10年程の間でも、古海水温、黒鉱の硫酸塩鉱物、花こう岩・火山岩、温泉水・地熱水、南極の塩湖、熱水鉱床の流体包有物、大気CO<sub>2</sub>、マグマ中の硫黄、月の石などに関する多様な研究を行っておられ、またこれらとは少し異なる岩石？ 水相互作用の研究も行っておられます。このような多様な研究は単発的に行われるのではなく、あるものは共通した問題意識に基づき、あるものは他の研究から発展したものであり、先生の中ではこれらの研究が各々関連しているように思われます。そのような研究全体の流れについては、酒井先生御自身が「研究の回顧と展望」と題して先生の退官記念号として出版された月刊地球号外No.16「新しい地球化学の構築」に書かれておられます。これは、大変面白い、また教えられることの多いもので、是非読まれることをお勧めいたします。

そのような先生の研究は、まず何よりも先生の強い好奇心から出発するように思われます。しかも、単なる好奇心ではなく、その科学的本質を見抜き、解明すべき問題が何かを見出す優れた能力を持っておられます。また、研究を始めるにあたり、豊富な化学の知識を駆使し、様々な工夫に満ちた実験装置を自作したり、既製の装置を改良したりし、御自身で実験を進めていかれます。ところが、そのような実験とは別に、安定同位体の分配を統計力学的に計算するような理論的な研究も得意とされています。そのような先生の魅力に引かれ、周囲には多くの人が集まり、活潑な研究が行われました。

(松葉谷 治)

#### 増田彰正名誉会員



増田先生が名誉会員になられたことは、私たち弟子にとって、大きな喜びです。先生の業績につきましては、2001年に柴田賞を受賞された際に田中剛会員から詳しいご紹介の記事が寄せられておりますので、そちらをご参照いただき

たいと思います（ニュースNo.167）。今回は、先生のご指導を直接受けた4人の会員の方から、当時の先生のご様子・印象、そして近況について記事をいただきましたので、ご紹介いたします。

(米田成一)

増田先生が名誉会員になられたと伺い、改めて年月を数えますと、我々が増田先生に師事してより20年になること感慨深いものがあります。私の増田先生へ抱いている印象は、とにかく、飽くなき知的好奇心と新しもの好きです。そして一つの事象から想像をたくましく展開させていく様子が思い浮かべられます。ただ、発想が先に進みすぎていて、世の中の技術の進歩がワテンポ遅れていたのが悔やまれます。その例としていつも以下のようなことを思い浮かべます。1990～1991年頃、先生は、惑星物質中の、質量数100前後の領域の元素の同位体組成（ZrからPdにかけて）に着目され、研究の推進に力を入れていらっしゃいました。当時は、この領域はそれほどポピュラーな研究対象ではありませんでしたし、また、測定技術においても、現在の様なマルチコレクター型のICP-MSはそれほど一般的でなく、やむを得ず表面電離型質量分析計で努力されてました。しかし、10年近くたって、隕石学会などに参加してみると、Nbだの、Ru等、とやたらこの領域の元素の同位体組成にスポットが当てられた発表が多い事実に接し、改めて増田先生の発想の先進性に驚嘆した次第です。この発想の展開において、増田先生はよく、「ある意味では」というのを口癖にいらっしゃいました。ついていけなくなると、不遜にも時たま「ある意味というのはどういう意味ですか」と先生につっこみをいれた事もあります。今後も是非、この先進的な発想で学会にも刺激を与え続けて下さることを願ってやみません。

(高橋和也)

私は増田先生が東大を退官される前の2年半ほどの間、研究室の助手として在籍させていただいた頃の思い出が今も鮮烈に残っています。当時、先生はいくつもの大きなプロジェクト研究をかかえ、理化学研究所を併任されており、またご退官前にもかかわらず大学院生の人数も多く、加えて5、6名の留学生在研究室に在籍しており、日々とてもお忙しく過ごされておりました。ご帰宅は毎日決まって終電間際であったため、居室を小走りに飛びだされても大学の正門、赤門の開

門時間に間に合わないことも多々あったようですが、そのような時はどうやら身軽に塀を乗り越えて帰っておられたようです。また、留学生の受入れ等に関しては、先生自ら大使館や外務省担当部局に出向いて交渉・相談をなされ、私生活の面においても公私にわたって彼らを支援されておられました。当然、助手である私にも文面では書き尽くせないほどの火の粉（雑用）は降りかかってきたわけですが、今思えば、このとき培われた不思議な忍耐力が現在の私を支えていると言えるのかも知れません。

（日高 洋）

増田先生の遺伝子：私は修士1年から博士2年の途中まで東大化学の増田研究室でお世話になりました。増田先生のお部屋に入るとすぐに小さな丸テーブルがあり、部屋の奥の窓際に事務机があります。増田先生をおたずねすると奥の机から書類の山をすり抜けながら、眼鏡をおはずしになって入り口に近い小さな丸テーブルにお座りになります。秘書の野本さんが週に何回か来られている時は、増田先生はいつも丸テーブルでお仕事をされていました。当時の私どもは、増田先生が小さな丸テーブルを使われ、秘書に立派な窓際の教授用の机を使ってもらっていると理解しておりました。丸テーブルと窓際の机の間に立派な大きな机あり、それが書類の山で完全に覆われていることを知ったのは増田先生が退官される直前でした。

大学院生、留学生など研究室のメンバー総勢20名以上を率いて、地球化学研究の最先端を走っていらっしゃった増田先生ですが、ご存じの通りお体は細く、学生と接するときもたいへん丁寧で化学の教授の先生方に共通して見られた「威厳」のようなものをあまり感じることはなかったのはたいへん不思議でした。お帰りはいつも夜10時をまわっており、週末も研究室にいらしていたように記憶しております。増田先生は見かけによらず（申し訳ありません）たいへんタフであられるのでは、というようなことを直接ご本人にお聞きした覚えがあります。その時増田先生は「自分は柳の木のようなもので風に揺られて頼りないようでも決して折れることはない」とお答えになったように記憶しております。

増田先生は研究成果を論文にすることの大切さを私たちに身をもって教えてくださいました。聞くところによると駅のホームで熱心に原稿に手を入れていらっしゃる光景を目撃された方もいらっしゃるそうです。

投稿した論文が12月に印刷になるか、年が明けて1月に印刷になるか、ということも大きな違いを将来もたらず可能性がある、ということも教えていただきました。最近、教育熱心で名高い工学部の先生から、「すべての学生に同じように研究教育に対する情熱を注ぎ込むことは間違いであることを覚りました」とうかがい私はたいへんな衝撃を受けました。増田先生に通じるものがあると私は直感したのですが、（増田先生の強力なお力添えで）驚くほど多くの卒業生が研究・教育機関で活躍することができた事実を踏まえると、増田先生流の教育はたいへん効率的であったのかと思います。我々弟子はおそらく知らず知らずのうちに増田先生の遺伝子の一部を受け継いでいるはずです。

我々地球化学研究を行う者が共通して発現すべき（あるいはいずれ発現する？）増田先生の遺伝子があります。そのことについては地球化学（2003）の増田先生の文章に織り込まれているかと思います。

（鍵 裕之）

増田先生の近況：01年の正月から、博士論文を指導した李承久博士の招きで韓国大田（テジョン）の韓国資源研究所で2年間にわたり客員研究員として研究を続けられました。東大から移設した日本電子の質量分析計が韓国の方々の熱意で生き返り、現在でも同位体希釈分析により希土類元素パターンが生み出されていることに喜んでいらっしゃいました。新しいデータも含めて、研究室の机の前には希土類元素パターンが壁を埋めるように貼られていました。また、炊飯器の使い方を覚えられたと自慢されていました。01年の夏に中国貴陽の地球化学研究所を訪問された時は、劉從強所長の学生と乾杯を続けられ、劉さんが心配されたほどです。

（中井俊一）

## 第18期第7回地球化学・宇宙化学 研究連絡委員会議事録

日時：2003年2月27日(木) 13:30～15:30

場所：日本学術会議第4部会会議室（6階）

出席者：田中剛委員長、青木謙一郎、日下部実、清水洋、下山晃、田結庄良昭、留岡和重、中澤高清、松田准一 各委員



## 報告事項

### 1. 学術会議関係

#### 1.1 連合部会（2003年2月12日開催。青木委員）

- (1) 新しい学術体系委員会（報告）：次の件について説明があった。

新しい学術体系委員会「新しい学術体系 社会のための学術と文理の融合」（第一次案）、価値選択の合理的根拠分科会報告（第三次ドラフト）、俯瞰型研究プロジェクト研究理論分科会「俯瞰型研究プロジェクトについて」報告書（案）、科学論のパラダイム転換分科会「人間と社会のための新しい学術体系」（案）。

- (2) 生命倫理特別委員会「生命科学の全体像と生命倫理 生命科学・生命工学の適切な発展のために」報告書（案）の説明があった。

- (3) 日本学術会議の在り方について（報告）

2002年11月11日開催の総合科学技術会議において「日本学術会議の在り方について（中間まとめ）」が決定されたが、「最終まとめ」は2002年末までには決定されなかった。したがって、日本学術会議としては、第19期（平成15年7月22日から）の会員選出手続きは、現行制度のもとで行わざるを得ない。

#### 1.2 第4部会（2003年2月12日開催。青木委員）

- (1) 日本学術会議・諸委員会の活動状況の報告があった。

- (2) 小委員会の新規招集申請：物理学研連から「放射光科学（Synchrotron Radiation Science）」小委員会を申請し承認された。

- (3) 対外報告（案）について：次の2件の対外報告（案）が一部修正の上、承認された。

地球化学・宇宙化学研連報告「環境学における地球化学のあり方について アンケート結果の集計結果」（案）、核科学総合研連、原子力工学研連、エネルギー資源工学研連・核工学専門委報告「大学法人における放射性同位元素・放射線発生装置・核燃料物質などの管理について」（案）。

- (4) 平成15年度代表派遣旅費配分額の決定及び派遣実施計画案の作成について：地質科学関連研連からは、6件が採択された。

- (5) 平成15年度夏部会について：長野県野辺山天文台と信州大学において行う。

#### 1.3 科学研究費補助金・分科地球惑星科学細目地球宇宙化学のキーワードの提案について：学術会議事

務局学術課へ次の修正意見を提出した（田中委員長）。

現行：元素分布，同位体，物質循環，地殻・マン  
トル化学，隕石化学，大気圏・水圏・生物  
圏化学

改正案：元素分布，同位体，スペシエーション，  
物質循環，放射年代，地殻・マン  
トル化学，地球外物質化学，火山化学，水・岩石  
相互作用，大気圏・水圏化学，生物圏地球  
化学，有機地球化学，環境地球化学，海洋  
化学

### 2. その他

- 2.1 国際隕石学会の招致：極地研・南極隕石研究委員会から相談のあった「国際隕石学会の日本招致」について、研連委員長の「基本的には賛成であり、研連からもできる限りの支援をしたい」との報告を、本研連として了承した。

- 2.2 第13回ゴールドシュミット国際会議（2003年9月）の準備状況の報告（田中委員長）。

## 審議事項

1. 分科地球惑星科学細目地球宇宙化学の平成16年度科学研究費審査員候補者推薦依頼について

関係学協会への候補者の推薦依頼文を審議し、了承した。基本的には従来通りである。

2. 環境学における地球化学についてのアンケート取りまとめ

提言を明確にすることなどの修正意見を参考にし、研連の対外報告としての最終まとめを田中委員長に一任した。

## その他

1. 次回の委員会開催予定（2003年5月15日）

2. 本研究連絡委員会以降、総合科学技術会議において「日本学術会議の在り方について」の最終まとめが2月26日付で出されたとの連絡があった。その概要は別紙のとおりである。

## （別紙）

「日本学術会議の在り方について」【概要】

平成15年2月26日

- ・ 科学者コミュニティの果たすべき役割
- ・ 科学者の英知を結集 科学技術の進展を方向づけ、

人類社会の課題への対処について助言 期待される役割を果たし得る新しい日本学術会議を構築

・日本学術会議に求められる機能

政策提言機能

- ・長期的・分野横断的・国際的な観点から、政府に対し科学的・中立的提言

科学に関する連絡・調整機能

- ・我が国科学者の意見の集約と各国科学者との連携・交流

社会とのコミュニケーション機能

- ・科学技術活動に関する情報発信と社会の意見の吸収・反映

総合科学技術会議：直接に科学技術政策を形成

日本学術会議：科学者の意見を幅広く集約して政策提言 役割分担して我が国の科学技術の推進に寄与

・当面の改革案

会員選出：学協会が推薦 科学的業績等に基づき、会員が選出

部門：7部制 2～3部門に大きくくり化（新分野・融合分野に対応）

運営体制：「総会主義」 理事会で機動的な意思決定

連携体制：「連携会員」（仮称）の導入等で体制強化

科学的水準の向上と機動的運営により、政府や社会に尊重される権威ある提言を可能に

・設置形態の在り方

総合的に考慮

- (1) 中立性・独立性・運営の柔軟性の確保、欧米主要国の通例

- (2) 我が国社会の状況等（提言等の社会的受け止め、寄付税制等）

国家的な設置根拠と財政基盤の保証を受けた独立の法人とすることが理想像

当面「国の特別な機関」を維持しつつ改革推進

10年以内に検討体制を設けて評価

改革の進捗状況と社会状況を見極め、より適切な設置形態め在り方を検討

・改革の推進

当面の改革（ ）を早急を実施

日本学術会議も体制を整え改革を推進

科学技術活動の評価などの面で総合科学技術会議

と連携し、科学技術政策に寄与

### 鉱物学研究連絡委員会（第18期，第8回） および鉱物学研究連絡委員会鉱床学専門委員会 （第18期，第8回）合同会議 議事録

日時：平成15年2月28日(金) 13：30～17：00

場所：日本学術会議 第4部会会議室（6階）

出席：青木謙一郎（学術会議会員）、山中高光（鉱物学研連委員長）、赤荻正樹（研連幹事）、井上厚行、大谷栄治、金田博彰、高橋正樹、豊逢秋、松原聡、吉田武義、梶原良道（鉱床学専門委員会委員長）、石渡明（専門委幹事）、上野宏共、浦辺徹郎、千葉仁、根建心具、丸山孝彦

欠席：有馬眞、松井正典（研連幹事）、溝田忠人

報告

- (1) 学術会議の報告（青木）

平成15年2月12(水)～13日(木)に日本学術会議において、連合部会、第4部会、常置委員会と特別委員会が開催された。鉱物学研連に直接関係する議題について報告する。

- (ア) 連合部会

- 1. 新しい学術体系委員会の報告について

6月総会に向けての対外報告案が、委員長および各分科会委員長から説明された。

新しい学術体系 社会のための学術と文理の融合

新しい学術体系委員会（第一次案）報告

価値選択の合理的根拠分科会報告（第3次ドラフト）

価値選択の合理的根拠分科会

「俯瞰型研究プロジェクトについて」報告書（案）

俯瞰型研究プロジェクト研究理論分科会

人間と社会のための新しい学術体系（案）

科学論のパラダイム転換分科会

- 2. 生命科学の全体像と生命倫理 生命科学・生命工学の適正な発展のために（案）

生命倫理特別委員会の標記報告書（案）について委員長から内容の説明があった。

- 3. 日本学術会議の在り方について（報告）

昨年11月11日の総合科学技術会議本会議において、「日本学術会議の在り方について（中間まとめ）」が決定された。その後、パブリック・コメントが行われ、12月19日には第12回専門調査会が開催

され、設置形態について国の機関と法人化のメリット・デメリットに関する議論が行われた。しかし、「最終まとめ」が昨年未までに決定されなかったことから、日本学術会議としては、第19期（平成15年7月22日～）の会員選出手続きは、現行制度の下で行わざるを得ず、第19期会員の任期等も未定である（文末別添資料参照）

(1) 第4部会

1. 諸報告

日本学術会議、諸委員会の活動状況について各委員から報告がなされた。

2. 小委員会の新規招集申請

物理学研連から「放射光科学（Synchrotron Radiation Science）」小委員会が申請され承認された。

3. 対外報告（案）について

下記の2つの対外報告（案）が一部修正の上、承認された。

地球化学・宇宙化学研連報告（案）

「環境学における地球化学のあり方について アンケートの集計結果」

核科学総合研連、原子力工学研連、エネルギー資源工学研連・核工学専門委員会報告（案）

「大学法人における放射性同位元素・放射線発生装置・核燃料物質などの管理について」

4. 平成15年度代表派遣旅費配分額の決定及び派遣実施計画案の作成について

地質科学関係からは次の6氏の派遣が採択された。

在田一則（地質研連）、日下部実（地化・宇化研連）、奥村晃史（第四紀研連）、松原聡（鉱物研連）、上野宏共（鉱床専門委）、小笠原憲四郎（古生物研連）。

5. 平成15年度夏部会について

長野県野辺山天文台と信州大学において行うことが決まった。

次回の連合部会・第4部会は6月に開催する。

学術会議の抜本的改革が先送りされたため、先般議論した研連の定員削減案（各研連の定員を削減し、6つの新しい研連をつくる案）が復活した形である。当面はこの案に従って運営していくことになろう（文末別添資料参照）。

(2) IMA 報告

(ア) IMA 委員会日本委員（山中）

IMA の各 committee, commission, working group の日本代表を次の通り決定した。

【Committees】Applied Mineralogy 溝田忠人, Classification of Minerals 宮脇律郎, Crystal Growth 塚本勝男, History and Teaching 渡辺隆, New Mineral Name 松原聡, Museums 豊遙秋, Ore Mineralogy 清水正明, Physics of Minerals 大谷栄治

【Commissions】Gem Minerals 宮田雄史, Environmental Mineralogy 村上隆

【Working Groups】Abstract 砂川一郎, Cosmic Mineralogy 留岡和重, Inclusion in Minerals 円城寺守, Mineral Equilibria 赤荻正樹, Organic Minerals 田崎和江

(イ) IMA 2006 KOBE 報告（山中、松原、大谷）

昨年のエディンバラで行われた IMA 総会で、神戸での開催が正式承認され、日本で36年ぶりに IMA が開催されることになった。鉱物研連の第17期では誘致委員会を発足させ、今期（第18期）では準備委員会を設立し、更に組織委員会に改組した。IMA 2006 KOBE 組織委員長は山中高光氏、組織委員会事務局長は大谷栄治氏、地区委員会（LOC）委員長は松井正典氏、財務委員長は村上隆氏、巡検委員長は松原聡氏、プログラム委員長は藤野清志氏が就任した。松原巡検委員長から3月中に初案をつくること、中国・韓国は巡検に加えないことが報告された。大谷事務局長からは、秋の各学会の集まりで IMA 神戸大会の宣伝を盛り上げたいとの考えが述べられた。

(3) その他報告（山中）

(ア) 科研費の見直し、キーワードの追加について

科研費の分科「地球惑星科学」の細目「岩石・鉱物・鉱床」は従来通り鉱物研連だけが窓口研連となることが決まった。席上配布資料に基づき、この細目の従来の8つのキーワードに(i)「鉱物物理」、(ii)「生体・環境鉱物」、(iii)「深成岩および変成岩」の3つを加えて11個とし、従来の「マグマ」を「マグマおよび火山岩」に変更することが了承された。追加の理由は(i)地球物理現象を鉱物物性的な観点から研究、(ii)鉱物学的な見地から環境問題を研究、(iii)岩石学の「深成岩および変成岩」が欠落、のためであり、変更は(iii)の追加に伴う措置である。地球化学・宇宙化学研連でもキーワードの多くに「化学」の文

字を加える等の変更を行った。

(4) 平成16年度科研費審査委員の選出について

今後の科研費審査委員選出方法および研連構成の各学会から推薦された1段・2段審査委員候補者の研連での推薦順位付けについて確認した。16年度は2段審査委員候補者2名と1段審査委員候補者6名を研連から推薦する。合わせてそれぞれの補欠候補者を次回研連で決定する。各学会に依頼する1段・2段審査委員推薦人の人数について山中委員長の家が説明された。

審議

(1) 科研費審査委員の推薦方式について

各学会から推薦される1段審査委員の候補者数は、2年分を合計すると常に次の通りになるようにする。岩鉱5、鉱物5、資源5、地質2、粘土1、地化1。これはこの研連に各学会から選出されている委員数(学会協議会員1名を除く)と一致する。各学会の実際の推薦数をこの原則に則り2年周期で充足する方法が承認された。

(2) 今後の鉱物学研連と鉱床学専門委との関係について

この2つは従来通り別組織とし、当面は統合しない。しかし、鉱床学専門委員会の委員も、辞令は鉱物学研究連絡委員会委員として発令されており、連絡の便宜上や意見交換の必要上からも、実際の会議は今後も合同で行うことで合意した。

(3) 組織改革で生じる新研連の委員について

6つの新研連(理學振興、科学と社会、ゲノム科学、学術情報発信、環境理学、惑星科学(席上資料配布))のうち、「惑星科学」には玉山明氏にお願いいただく。それ以外の研連から委員を出すよう要請された場合は、選出母体の学会にとらわれず柔軟に対処することが了承された。

平成15年2月26日、総合科学技術会議において「日本学術会議の在り方について(最終まとめ)」が決定した。その概要を別添資料に示す。(資料省略)

(文責:石渡 明)

第18期海洋科学研究連絡委員会

(第8回)議事録

日時:平成15年3月11日(火) 13時30分~16時00分

場所:日本学術会議 第4部会議室

出席者:西田篤弘,谷口旭,石井春雄,伊藤絹子,井

内美郎,平啓介,角皆静男,友定彰,花輪公雄,伏見克彦,前田明夫,灘岡和夫,松山優治,山口征矢,佐藤義夫,蒲生俊敬,滝沢隆俊(オブザーバー)

欠席者:斎藤常正,杉本隆成,寺崎誠,古谷研,西田周平,松田治

委員会開催に先立ち、今年1月に急逝された野崎義行委員への哀悼の意が表された。続いて、諸事情により辞任された松永勝彦委員に替わって委員に就任された佐藤義夫氏(東海大学)と、野崎義行委員の後任として就任された蒲生俊敬氏(北海道大学)の紹介があった。

・第7回議事録について

事前にメールで回覧し、必要な修正を施してあった第7回海洋科学研究連絡委員会(平成14年11月26日開催)の議事録案を承認した。

・報告事項

(1) 日本学術会議関連(谷口委員長)

2月12日に開催された連合部会で報告された、日本学術会議の将来をめぐる情勢について、説明があった。その後2月26日付で総合科学技術会議は、日本学術会議のあり方専門調査会の答申に基づいて「日本学術会議の在り方について」をとりまとめ、公表したが、その概要が配布され、全文が回覧された。その際、総合科学技術会議がホームページで募集した「専門調査会における検討 中間まとめ」に対するパブリックコメントの取りまとめも回覧された。

公表された「日本学術会議の在り方について」には、当面第19期会員選出を従来どおり進め、学術会議の設置形態については今後10年以内に検討体制を設けて成案を得るべきであることが明記された。会員数を200~300人程度とし、外に連携会員を設ける一方、研連が廃止することが提案されているので、実際に1400に達する学協会との連帯をどう確保するか、国際学術団体対応のNational Committee機能をどう果たすかなど、具体的な検討が始まるだろうが、それがどこでどのように進むのか、判然としていない。このとりまとめに盛り込まれている、その他のさまざまな改革案の実現シナリオも、全く判然としていない。

(2) IOC分科会(ユネスコ国内委員会自然科学小委員会)(平委員)

平成15年2月28日開催のIOC分科会で主査の交替が承認され、平啓介氏から寺崎誠氏へ交替することになった。

平成15年9月、オーストラリア、パースで開催されたWESTPAC第5回総会の報告、GOOS関連の動向、JCOMMの動向、IODE（国際海洋データ交換）のポリシーについて報告があった。

#### ・協議事項

- (1) 海洋科学研連委員の交替について（谷口委員長）  
野崎義行委員の後任として蒲生俊敬氏の就任を承認した。

- (2) 科学研究費補助金のキーワード等の見直しについて（谷口委員長）

2月28日の科研費分科会で各研連から出された意見や要望について検討された。本研連が関係する細目「環境動態解析」では、すでに対応研連が12あってキーワード数（10語）よりも多かったところへ、新たに5つ以上の研連から参加希望が出たため終始がつかなくなり、今回は一切の改善を見送ることになった模様である。複合領域のため関連する分野も多く、混乱を招きやすいので、良い改正案を分科会に期待するという意見、窓口研連を中心にして良いルール作りから始めるべきであるという意見、キーワード重視を基本方針とすることで良いルールが可能になるであろうという意見などがあつた。

- (3) 科学研究費補助金の審査員候補者の推薦作業について（谷口委員長）

平成16年度の科研費審査員候補者の推薦は昨年と動揺に行われることが学術振興会から表明された。それを受けて学術会議の作業が始まるが、そのタイムスケジュールは例年同様極めて窮屈なので、各学会では予め準備をすすめて欲しい旨、委員長から要望があつた。また、各学会から科研費審査員候補者を推薦するときに候補者の略歴と主要業績票を添付し、本研連で候補者選考の参考に供することを承認した。その書式見本を谷口委員長より各学会事務局へ送ることとした。

この他、平成15年度から分野領域の大枠化、分科細目の見直し、キーワードの整備などが行われたものの、科研費にまつわる根源的な問題の多くは未だ解決されていないこと、また、トップダウン的な研究費配分が強調される陰で基礎研究が軽視されそうな危うさますます懸念されること等々の意見があり、今後の動向について学術会議が果たすべき役割

は大きいとの認識で一致した。

- (4) 平成16年度日本海洋学会春季大会シンポジウムについて（滝沢委員）

海洋科学技術センターの海洋地球研究船「みらい」が運航開始して5年経過したところで、これまでの研究成果を総述して評価を受け、今後5年間に關する提言を得ることを目的としたシンポジウムを企画したので、本研連委員長からも意見を貰いたい旨、滝沢委員から紹介があつた。これを受けて、ボトムアップの計画が難しいという「みらい」の運用体制の改善が必要であること、将来を担う大学院学生の乗船が徐々に難しくなっている現状の抜本的な改善が必要であること、船舶のような大型施設を建造する一方でそれを効率的に運用するための運営費を削減するという我国の予算編成のあり方が有効な税金の使い方と矛盾することなど、本研連が深い関心をよせている諸問題について活発な意見交換を行った。それを受けて、「みらい」の将来に關する提言とともに、対外報告「海洋科学の教育と研究のための船舶不足と水産系大学練習船の活用について」を配布するなどして、海洋研究教育における船舶の重要性について本研連が考えてきたことも幅広く紹介することを了承した。

- (5) 初等中等教育における海洋教育の問題点について（角皆委員）

角皆委員より、社団法人海洋調査協会の依頼により執筆した原稿「わが国の初等中等教育における海洋教育の現状に思う」を配布したうえで、問題点の指摘と改善に關する提言があつた。それを題材にして、日本における海洋教育問題には明治期の実学偏重精神の残留が災いしていること、内陸域と縁海域とでは子供の海への親しみに差があるとする常識への疑念、ゆとり教育の枠を利用して、海洋学会が中心になって積極的に初中等教育へ貢献していくことが有益であることなど、活発な意見が出た。

今回は2003年5月14日(水) 13時45分～ 開催の予定。

（議事録作成・伊藤絹子）

## 九州大学大学院理学研究院 地球惑星科学部門教官公募

このたび地球惑星科学部門太陽惑星系物質科学講座所属助手候補者を下記の要領で募集することになりました。つきましては、関係者への周知についてよろし

くお取り計らいくださいますようお願い申し上げます。

なお、太陽惑星系物質科学講座は末尾の表に示します4専門分野で構成されており、今回の募集はそのうちの初期太陽系進化学専門分野にかかわるもので、二次イオン質量分析計又は希ガス質量分析計を用いた研究実績をお持ちの方が望ましいと考えております。また、着任された場合には、学生実験（放射線実験）を担当していただく予定です。

#### 記

1. 募集人員：助手1名（博士の学位を持つか平成16年3月までに取得見込みの方）
2. 専門分野：初期太陽系進化学（地球外物質の実験的研究）
3. 着任時期：決定後なるべく早い時期
4. 提出書類：
  - 履歴書
  - これまでの研究歴（A4用紙2枚以内）
  - 研究業績リスト（レフェリー付の原著論文、レフェリー無しの論文、総説、報告書、著書に区分し、投稿中のものには投稿原稿を添付すること）
  - 主要論文別刷り3篇以内（業績リストに印をつける、投稿中のものは投稿原稿）
  - 着任した場合の研究・教育に関する抱負（A4用紙1枚程度）
  - 応募者を熟知し、意見を聞ける方2名の氏名とその連絡先並びに応募者との関係
5. 応募締切：平成15年6月16日(月) 必着
6. 書類送付先および問合せ先：
  - 〒812 8581 福岡市東区箱崎6 10 1
  - 九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門
  - 太陽惑星系物質科学講座所属助手候補者選考委員会委員長 村江達士
  - Tel : 092 642 2660, Fax : 092 642 2684
  - E-mail : murae@geo.kyushu-u.ac.jp
7. その他：
  - (1) 提出書類の内、 以外はすべてA4用紙を使用すること
  - (2) 封筒に「応募書類在中」と朱書きし、簡易書留で郵送のこと

参考：

| 専門分野     | 教授   | 助教授          | 助手            |
|----------|------|--------------|---------------|
| 地球惑星物質科学 | 加藤 工 |              | 上原誠一郎<br>三木 孝 |
| 有機宇宙地球化学 | 村江達士 | 山内敬朗         | 北島富美雄         |
| 希元素地球化学  | 島田允堯 | 石橋純一郎        | 本村慶信          |
| 初期太陽系進化学 |      | 関谷 実<br>中村智樹 | (今回募集)        |

### 北海道大学大学院理学研究科 地球惑星科学専攻教官公募

このたび、当専攻では下記の要領で助教授3名を広く募集することになりました。ふるってご応募いただくとともに、関係各位にご周知下さいますようお願い申し上げます。

#### 記

1. 職種・人員・専攻分野
  - (1) 地球惑星物質圏科学講座：助教授1名（定年退職教官の1年前倒し補充）
    - 専攻分野：鉱物学的、結晶学的手法による地球・惑星物質の研究
  - (2) 地球惑星進化科学講座：助教授1名（定年退職教官の1年前倒し補充）
    - 専攻分野：微古生物学に基づく地球史の研究
  - (3) 地球惑星進化科学講座：助教授1名（欠員補充）
    - 専攻分野：野外調査とテクトニクス、堆積学、または岩石学に基づく地球表層形成プロセスの研究
2. 応募資格：博士号を取得していること
3. 着任予定時期：決定後できるだけ早い時期
4. 応募書類：
  - イ) 履歴書（内外の学会活動、受賞歴、参加しているプロジェクト研究歴、各種研究費受領歴なども記載すること）
  - ロ) これまでの研究経過（2,000字程度）
  - ハ) 研究業績目録（和文のものは和文で表記すること）
    - A. 査読のある原著論文
    - B. 査読のない論文、総説など
    - C. 著書
    - D. 解説、報告などその他の出版物で特に参考に

なるもの

二) 主な原著論文の別刷または著書 5 篇以内(複写可)

ホ) 今後の教育・研究の計画・抱負(2,000字程度)

へ) 応募者について照会が可能な方 2 名の氏名と連絡先

5. 応募締め切り: 2003年 7月 7日(用) 必着  
封筒の表に「教官公募関係」と朱書きし, 簡易書留にて郵送すること。

また, 公募書類中の第 1 ページに応募先講座名と専攻分野を明記すること。

6. 書類の送付先及び問い合わせ先:

〒060 0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目  
北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻  
鈴木徳行

Tel: 011 706 2730 (ダイヤル・イン)

Fax: 011 746 0394

E-mail: suzu@ep.sci.hokudai.ac.jp

### 地球惑星科学専攻教官構成 (2003年 5月 1日現在)

#### 地球惑星物質圏科学講座

教授 宇井忠英(2004年 3月退官予定: 別途公募予定), 藤野清志, 小笹隆司, 蒲生俊敬

助教授 菊地 武(2004年 3月退官予定: 本公募), 新井田清信, 橋元明彦, 角皆 潤

講師 三浦裕行

助手 中川光弘, 中川書子

#### 地球惑星進化科学講座

教授 岡田尚武, 鈴木徳行, 在田一則

助教授 藤原嘉樹(2004年 3月退官予定: 本公募), (欠員: 本公募)

講師 川村信人, 沢田 健

助手 岩田圭示, 前田仁一郎

#### 地球惑星流体科学講座

教授 播磨屋敏生, 渡部重十, 林 祥介

助教授 知北和久, 見延庄士郎, 倉本 圭

講師 遊馬芳雄

助手 小高正嗣

#### 地球惑星物理科学講座

教授 西田泰典(2004年 3月退官予定: 別途公募

予定), 小山順二, 蓬田 清, 池田隆司

助教授 森谷武男, 笹谷 努, 前田 壺

助手 吉澤和範

#### 地震火山研究観測センター(協力講座)

教授 島村英紀, 笠原 稔, 岡田 弘

助教授 高波鐵夫, 茂木 透, 大島弘光, 谷岡勇市郎, 橋本武志

助手 山本明彦, 勝俣 啓, 高橋浩晃, 村井芳夫, 森 濟, 西村裕一, 青山 裕

#### 総合博物館(教育協力)

教授 松枝大治

助教授 箕浦名知男

なお, 教育・研究にあたっては上記の講座制にかかわらず, 研究室・グループ制で運営されており, その構成は年々変更が可能です。また全教官は, 大学院教育のほか, 全学教育・学部教育も担当しています。

### 東京大学大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻教官の公募について

東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻では, 下記の要領で地球生命圏科学講座教官を公募することになりました。

記

#### 1. 公募人員

地球生命圏科学講座助教授 1 名

#### 2. 募集分野

フィールドワーク, 試料の分析, 室内実験などから得られた一次データを基に, 地球生命圏の化学的環境がいかんして形成され変動してきたかを研究する分野

#### 3. 応募資格

博士の学位を有し, 大学院博士前期・後期課程での教育・研究指導ができる方

着任後は地学科の講義や実習も担当して頂く予定

#### 4. 着任時期

決定後できるだけ早い時期

#### 5. 募集方法

自薦または他薦(他薦の場合は本人が了解していること)

#### 6. 提出書類

- 1) 履歴書(学歴および職歴)
  - 2) これまでの研究概要(1,600字程度)
  - 3) 研究業績目録(査読論文とそれ以外の総説, 著書などに分類)
  - 4) 主要な原著論文別刷り(コピー可)3編以内
  - 5) 今後の研究・教育の計画および抱負(1,600字程度)
  - 6) 応募者に関する所見を伺える方2名の氏名および連絡先
  - 7) 他薦の場合は, 上記1)から4)
7. 応募締切  
平成15年7月10日(月)(消印有効)
8. 書類送付先  
〒113 0033 東京都文京区本郷7 3 1  
東京大学大学院理学系研究科  
地球惑星科学専攻専攻長  
浦辺徹郎  
封筒の表に「地球生命圏科学講座教官応募」と朱筆して(簡易)書留にて郵送のこと
9. 問い合わせ先  
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻  
松本 良  
Tel: 03 5841 4522, Fax: 03 5841 4569  
E-mail: ryo@eps.s.u-tokyo.ac.jp
10. その他  
\* 平成15年4月現在の地球生命圏科学講座のスタッフは以下の通りです。  
教授: 松本良, 村上隆, 浦辺徹郎, 山岸皓彦, 棚部一成  
助教授: 杉山和正, 小暮敏博, 大路樹生  
助手: 荻原成騎, 砂村倫成  
\* 当専攻に関する情報は, ホームページ(<http://www.eps.s.u-tokyo.ac.jp>)をご覧ください。

### 北海道大学大学院地球環境科学 研究科教官公募

本研究科では下記の要領で教官を公募致します。つきましては, ご多用のところ誠に恐縮に存じますが, 貴機関の関係者へご周知いただくとともに, 適任者の応募について宜しくお取り計らい下さいますようお願い申し上げます。

#### 記

1. 公募人員: 地球環境変遷学講座: 教授1名

2. 公募内容: 本研究科は地球環境問題を克服する新しい学問を創出することを目標に研究教育を行っており, その一環として21世紀COE「生態地球圏システム劇変の予測と回避」の拠点形成研究を実施しているところです。また, 既存の専門分野にとらわれない新しい研究体制を目指し, これまでの専攻や講座の構成を改組する方向で議論しております。本公募では, 地球科学にもとづいて地球環境問題の理解や解決に向けた研究を遂行しつつ, 若い研究者・専門家の育成にも尽力できる方を希望します。当研究科の大学院生のほか理学部地球科学科学生の教育や全学教育にも携わって頂きます。
3. 提出書類:
  - (1) 履歴書(A4)
  - (2) 研究業績目録(原著論文, 総説, 著書, 報告書その他に分け, 査読の有無を明示のこと)
  - (3) 主要論文の別刷またはコピー(5編)
  - (4) これまで行ってきた研究の概要(1,500字程度)
  - (5) 今後の研究教育に関する抱負(1,500字程度)
  - (6) 意見を求めることのできる人2名の氏名と連絡先  
なお, 応募書類は特に要望がなければ返却しません。
4. 応募期間: 平成15年7月31日(木) 必着
5. 着任時期: 決定後できるかぎり早い時期
6. 書類送付先:  
〒060 0810 札幌市北区北10条西5丁目  
北海道大学大学院地球環境科学研究科  
地圏環境科学専攻長 大畑哲夫宛  
(応募書類と朱筆し, 簡易書留で送付すること)
7. 当該講座構成:  
教授: 大場忠道(平成16年3月退官)  
教授: 南川雅男  
助教授: 長尾誠也  
助教授: 山本正伸  
助手: 入野智久
8. 問い合わせ先:  
南川雅男  
Tel: 011 706 2234, Fax: 011 706 4867  
mas@ees.hokudai.ac.jp  
当研究科のホームページ:  
<http://www.ees.hokudai.ac.jp/>  
当専攻のホームページ:



<http://www.geo.ees.hokudai.ac.jp/>

## 九州大学大学院理学研究院 地球惑星科学部門教官の公募について

このたび、九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門の太陽惑星系物質科学講座所属助教授候補者を下記の要領で募集することになりました。

### 記

1. 職種・人員：太陽惑星系物質科学講座所属助教授 1名
2. 専門分野：地球惑星物質科学（鉱物物性を実験的に研究し、かつ教育に熱意のある方を希望）
3. 着任時期：決定後なるべく早い時期、平成16年4月以前の着任を希望
4. 提出書類：
  - (1) 履歴書
  - (2) これまでの研究歴（A 4用紙2枚以内）
  - (3) 研究業績リスト  
原著論文（査読の有無、投稿中のものを含めてよい）、総説、報告書、著書に区分
  - (4) 主要論文別刷もしくは投稿中論文のコピー、3篇以内（研究業績リストに 印を付す）
  - (5) 着任した場合の研究・教育に関する抱負（A 4用紙2枚以内）
  - (6) 応募者を熟知し意見を聞ける方の氏名と連絡先並びに応募者との関係
5. 公募締切：平成15年9月5日(金) 必着
6. 書類送付先および問い合わせ先：  
〒812 8581 福岡市東区箱崎6 10 1  
九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門  
太陽惑星系物質科学講座所属助教授候補者選考委員会  
委員長 加藤 工  
Tel : 092 642 2653, 2652, Fax : 092 642 2684  
E-mail : tkato@geo.kyushu-u.ac.jp
7. その他：
  - (1) 提出書類の内、別刷以外はすべて A 4用紙を使用すること
  - (2) 封筒に「応募書類在中」と朱書きし、簡易書留で郵送のこと

## 九州大学大学院理学研究院 地球惑星科学部門教官の公募について

このたび、九州大学大学院理学研究院地球惑星科学

部門の固体地球惑星科学講座担当教授候補者を下記の要領で募集することになりました。

### 記

1. 職種・人員：固体地球惑星科学講座担当教授 1名
2. 専門分野：岩石循環科学（地球内部の物質循環・進化を研究し、かつ教育に熱意のある方を希望）
3. 着任希望時期：平成16年4月
4. 提出書類：
  - (1) 履歴書
  - (2) これまでの研究概要（A 4用紙2枚以内）
  - (3) 研究業績リスト { 原著論文（査読の有無）、総説、報告書、著書に区分 }
  - (4) 主要論文の別刷3編（研究業績リストに 印を付す）
  - (5) 研究・教育に対する抱負（A 4用紙2枚以内）
  - (6) 応募者を熟知し、意見を聞ける方2名の氏名とその連絡先並びに応募者との関係
5. 公募締切：平成15年9月5日(金) (必着)
6. 書類送付先および問い合わせ先：  
〒812 8581 福岡市東区箱崎6 10 1  
九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門  
固体地球惑星科学講座担当教授候補者選考委員会  
委員長 佐野弘好  
Tel : 092 642 2606 (ダイヤルイン)  
Fax : 092 642 2686  
E-mail : sano@geo.kyushu-u.ac.jp
7. その他：
  1. 提出書類のうち、(4)以外は全て A 4用紙を使用すること。
  2. 封筒に「応募書類在中」と朱書きし、簡易書留で郵送のこと。

## 第40回理工学における同位元素・放射線研究 発表会プログラムについて

会期：平成15年7月9日(水)～7月11日(金)  
会場：日本青年館（新宿区霞岳町15番地）JR千駄ヶ谷  
谷または信濃町から徒歩10分国立競技場の南側  
参加費：2,000円（学生無料）  
懇親会参加費：2,000円  
要旨集代金：4,000円

一般講演の他以下の特別講演とパネル討論が予定されています。

特別講演 1 : 7月9日(水)

光電子増倍管の最近の進歩と応用

袴田敏一(浜松フォトンクス)

特別講演 2 : 7月9日(水)

四次元放射線治療 白土博樹(北大・病院)

特別講演 3 : 7月10日(木)

放射線バイオ技術の現状と動向  
渡辺 宏(原研・高崎)

パネル討論 1 : 7月9日(水)

加速器質量分析(AMS)の最近の話題

- (1) AMSの原理・特徴ならびに様々な利用法  
中村俊夫(名大・年代測定センター)
- (2) <sup>14</sup>C年代測定の新展開  
吉田邦夫(東大・RI炭素年代測定室)
- (3) 新薬開発における<sup>14</sup>C標識トレーサー研究への応用  
野口英世(加速器分析研究所)
- (4) 薬物動態試験における応用例  
池田敏彦(三共・薬剤動態研)

パネル討論 2 : 7月10日(木) 前立腺ガンと放射線利用

パネル討論 3 : 7月11日(金) 医療用加速器とガン放射線治療の進歩

詳細は、日本アイソトープ協会のホームページ(<http://www.jrias.or.jp>)を参照

本年度の上記研究発表会のプログラムができました。

今回は、地球化学への投稿も件と多く、特別講演・パネル討論に地球化学関連のテーマが選ばれております。最新の情報と学際的討論の場所として有効に利用されるよう会員の皆様に積極的に参加されるようご案内いたします。

### 生物地球化学研究者ネットワークへの招待 ~生物地球化学研究会 第二回シンポジウム~

「生物地球化学(Biogeochemistry)に関する日本の研究者は、対象となる領域の広さから異なる学会に分散して所属しているため、横のつながりや分野横断的なアプローチが不十分であり、総合科学であるはずの生物地球化学研究の発展の妨げとなっている。」という危機感から、関連する研究者や大学院生の情報交換の場として、生物地球化学研究会が発足しました。第二回シンポジウムでは、生物地球化学に関連する研究者、大学院生によるポスター発表を中心とした研究

交流を深めることを目的としています。また、今回は下記のような陸上生態系における物質循環の観測方法について、野外での議論・情報交換も企画しています。興味のある研究者、大学院生の参加や研究発表(ポスター)を歓迎します。参加希望者、発表希望者は担当者(柴田英昭 [shiba@exfor.agr.hokudai.ac.jp](mailto:shiba@exfor.agr.hokudai.ac.jp))までご一報ください。

日時 2003年7月11日(金)~12日(土)

- 7月11日(金) 15:00~16:30 基調講演  
7月11日(金) 16:30~18:00 ポスターセッション  
7月11日(金) 18:00~20:00 懇親会(ポスターセッション会場にて)  
7月12日(土) 9:00~12:00 エクスカーション・フィールドディスカッション

場所

基調講演・ポスターセッション

北海道大学遠友学舎

(〒001 0018 札幌市北区北18条西7丁目)

エクスカーション・フィールドディスカッション

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

札幌研究林実験苗畑

(〒060 0809 札幌市北区北9条西9丁目)

基調講演 7月11日(金) 15:00~16:30

1. 生物地球化学研究会のねらいと今後の展開(国立環境研究所:佐竹研一)
2. 河川をめぐる生物地球化学研究の最前線(名古屋大学大学院:木平英一)
3. 北海道大学研究林における生物地球化学研究の動向(北海道大学:柴田英昭)

ポスターセッション 7月11日(土) 16:30~18:00

生物地球化学に関連する研究者、大学院生の研究をポスター形式で発表し、情報交換を図る(発表者募集中)。セッション終了後は会場内にて懇親会を開催。

エクスカーション 7月12日(土) 9:00~9:45

web-FACEプロジェクト(地球温暖化に対する樹木の応答に関するCO<sub>2</sub>負荷実験)の紹介

(北海道大学:小池孝良)

## フィールドディスカッション

7月12日(土) 10:00~12:00

生物地球化学研究における土壌水の観測方法の実際

(東京農工大学: 戸田浩人)

事務局

柴田英昭

(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)

Tel: 01654 2 4264, Fax: 01654 3 7522

E-mail: shiba@exfor.agr.hokudai.ac.jp

参加費は必要ありませんが、懇親会の実費を徴収させていただきます。

## 第25回宇宙ステーション利用計画 ワークショップのご案内

会合名: 第25回宇宙ステーション利用計画ワークショップ

開催日時: 平成15年9月9日(火) 9:30~17:30

9月10日(水) 9:30~17:30

開催場所: 砂防会館シェーンパッサ・砂防

(〒102 0093 東京都千代田区平河町2 7 5)

会合の内容及び目的: 宇宙ステーション利用に関する我が国の推進体制, 宇宙環境利用研究の実施状況及びその将来展望等について, ISS計画に関して, 広く国民一般の理解を深め, ISS/JEM利用の拡大・多様化を図るとともに, 参加者(利用コミュニティ)の意見をとりまとめ, 今後の宇宙ステーションの利用計画等に反映する。

主催者名: 宇宙開発事業団

共催者名: 文部科学省(予定)

後援団体名: 総務省(予定), 国土交通省(予定)

参加費: 無料

詳細問い合わせ先:

宇宙環境利用推進センター

宇宙実験推進部 担当: 篠崎/佐藤

〒169 8624 東京都新宿区西早稲田3 30 16

Tel: (03) 5273 2442, Fax: (03) 5273 0705

E-mail: sepd@jsup.or.jp

(参考)

●宇宙開発事業団ホームページ:

<http://www.nasda.go.jp/>

●宇宙環境利用推進センターホームページ:

<http://www.jsup.or.jp>

## 第26回極域気水圏シンポジウム開催のご案内

国立極地研究所では毎年極域に関わる研究をテーマとしたシンポジウムを開催しております。このうちの大気, 雪氷, 海洋圏の研究に関する極域気水圏シンポジウムを本年も開催することとなりました。

現在南極地域では, 日本南極地域観測隊による短期間の集中観測として5ヵ年計画で「極域大気 雪氷 海洋圏における環境変動機構に関する研究」が終了し, 新たに「南極域からみた地球規模環境変化の総合研究」がスタートしました。また長期間の観測を主目的とした「地球環境変動に伴う大気・氷床・海洋のモニタリング」, 「衛星データによる極域地球環境変動のモニタリング」が継続して実施されています。国内ではこれまで得られた観測データ, 試料等による研究が進展しています。特にドームふじ観測拠点で得られた氷床コア, 大気中及び雪氷中の微量成分分析データ等を利用した研究からさまざまな成果が得られています。一方北極地域では, スパールバル, グリーンランド, カナダ, シベリア等多くの地域において, 大気, 雪氷, 海洋に関する多岐にわたる観測・研究が行われています。

これまでの諸観測から得られた資試料の解析結果はもとより, 南北両極・寒冷域を主な対象とした大気科学, 雪氷学, 海洋学に関する研究成果, 研究展望などを議論するシンポジウムを下記のとおり開催いたします。広く発表を受け付けておりますので, ご応募くださるようご案内申し上げます。

日時: 2003年11月19日(水), 20日(木)

会場: 国立極地研究所 6階講堂

申込締切: 2003年9月24日(水) 必着

問合せ先:

国立極地研究所 藤田秀二, 岡崎美紀

〒173 8515 東京都板橋区加賀1 9 10

Tel: 03 3962 7125, 03 3962 5517

Fax: 03 3962 5719

E-mail: icesamp@pmg.nipr.ac.jp



「火山に魅せられた男たち」

噴火予知に命がけて挑む科学者の物語

原題 “Volcano Cowboys” Dick Thompson 著

山越幸江訳 地人書館 定価2,400円

当分、噴火はないと考えられていた富士山に火山性微動が観測されるようになり、にわかに地震活動や地下構造、過去の噴火の調査などが行なわれ、ハザードマップの作成も急がれている。火山国日本にとって火山研究はきわめて重要である。

この本は、出世するために机に向かって論文を書くなどとはまったく考えずに、野外の噴火予知研究に専念する米国地質調査所の火山学者たち（ボルケーノ・カウボーイ）の物語である。1980年突然眠りをさました北米セントヘレンズ山の噴火と1991年、20世紀二番目に相当する大噴火を起こしたフィリピン、ピナツボ山の活動がおもな部分をしめ、インドネシアのガルングン火山、南米コロンビアのネバド・デル・ルイス火山などの噴火も取り上げられている。

切迫する噴火活動の中で命がけの観測を行い、寝食もとれないまま時間が過ぎていく。研究者間の感情的対立や研究方式の違いから生じる軋轢など学術論文では書かれない研究の内幕が、三部12章（総ページ数439）の中に見事に描かれている。巻末には、各章別の文献と索引が付けられていて利用しやすい。

本書では火山学が劇的な進歩を遂げたセントヘレンズ山の噴火以降の十年間がとりあげられている。新しく開発された地震計、山体変形測定装置、火山ガス観測装置などについても紹介があり、ゲリラや盗人たち

から観測装置を守る苦勞も語られている。

ピナツボ火山の噴火では、大噴火と台風の来襲が迫るなか、避難場所も確保できないままに8万人の住民の退避を遂行し、同時に米空軍が海外にもつ最大の基地であるクラーク基地にも避難を適用し、人命被害が最少限に押さえられた経緯などが書かれている。15秒間で2万4千メートルもの高さに達する噴煙、日中でも真っ暗闇となり稲妻が走る光景、迫るくる泥流や火砕流、逃げまどう避難民などの描写が生々しい。

観測から噴火が切迫していると思えるが、それが上部機関にすら正確に伝わらないもどかしさ、噴火の時期が遅れることもままある中で、避難勧告を出すという大きなプレッシャー、取材のマスコミが押し掛ける中で観測を継続することの困難さなどが語られている。警告レベルの設定、避難勧告の通告などが国でも参考になる個所が多い。

著者は長年、タイム誌の特派員をしていた人で、火山に情熱を感じ、多くの火山学者にインタビューするなど2年間をかけて本書を完成させた。訳者は宇宙塵の研究などで日本地球化学会とも深い繋がりのあった東京大学宇宙線研究所教授の故山越和雄氏の夫人で、専門用語をふくめて非常に読みやすく訳されている。火山についての興味ある読み物である。

（脇田 宏）

### ニュースへ記事やご意見をお寄せください

皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会，シンポジウムの案内，人材募集，書評，研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上，電子メール，フロッピー（マックもしくは Dos/V いずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2003年7月下旬頃を予定しています。ニュース原稿は6月下旬までにお送りいただくよう，お願いいたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

#### 編集担当者

米田成一

〒169 0073 東京都新宿区百人町3 23 1  
国立科学博物館理工学研究部

Tel : 03 3364 7142 , Fax : 03 3364 7104 ,

E-mail : s-yoneda@kahaku.go.jp

高橋和也

〒351 0198 埼玉県和光市広沢2 1  
理化学研究所加速器基盤研究部

小林貴之（ホームページ）

〒156 8550 東京都世田谷区桜上水3 25 40  
日本大学文理学部

|   |   |                    |      |
|---|---|--------------------|------|
| 165 mm  |   |                    |      |
| 25 mm   | <table border="1" style="width: 100%;"><tr><td style="width: 40%; padding: 2px;">講演番号記載<br/>スペース（空欄）</td><td style="width: 60%; padding: 2px;">講演題目</td></tr></table> | 講演番号記載<br>スペース（空欄） | 講演題目 |
|   | 講演番号記載<br>スペース（空欄）  | 講演題目               |      |
| 40 mm   |   |                    |      |
| ○田中剛 <sup>1</sup> 、山本鋼志 <sup>1</sup> 、南雅代 <sup>1</sup> （ <sup>1</sup> 名古屋大院環境）  |   |                    |      |
| 講演要旨作成上の注意  |   |                    |      |
| <ol style="list-style-type: none"><li>1) ワードプロで記入してください。</li><li>2) 枠は範囲を示しているだけで、書く必要はありません。</li><li>3) A4用紙に上部31 mm、下部30 mm、左22.5 mm、右22.5 mmのマージンを設定してください。</li><li>4) 講演題目、発表者、ならびに所属は、例示に準じて記入し、講演者左側に○印をつけてください。講演題目などに関する英文表記についても同様です。</li><li>5) 左上の講演番号を印刷するスペースは必ず開けておいてください。</li><li>6) 原稿は87%に縮小され、B5版になります。文字が小さくなりすぎないように注意してください。</li><li>7) 図表が必要な場合は、本文枠内に直接記載もしくは貼り付けてください。貼り付ける際は、しわにならないように、かつ剥がれないように注意してください。テープの使用は避けてください。</li><li>8) 用紙はA4上質紙を使用し、印字は鮮明にお願いいたします。感熱紙の使用は避けてください。</li><li>9) 一般講演は1枚の用紙です。</li><li>10) 講演要旨の締め切りを厳守してください。</li></ol> |   |                    |      |
| 本例は、A4用紙に12ポイントで印字した原稿をB5版に縮小したものです。  |   |                    |      |
| 190 mm  | <b>Theme</b>  |                    |      |
|   | ○ T. Tanaka <sup>1</sup> , K. Yamamoto <sup>1</sup> and M. Minami <sup>1</sup><br>( <sup>1</sup> Graduate School of Environmental Studies, Nagoya Univ.)              |                    |      |
| 20 mm   |   |                    |      |